

今月のエキゾチック症例(第22回 2026年5月)

胃腸鬱滞かと思ったらーウサギの肝葉捻転ー

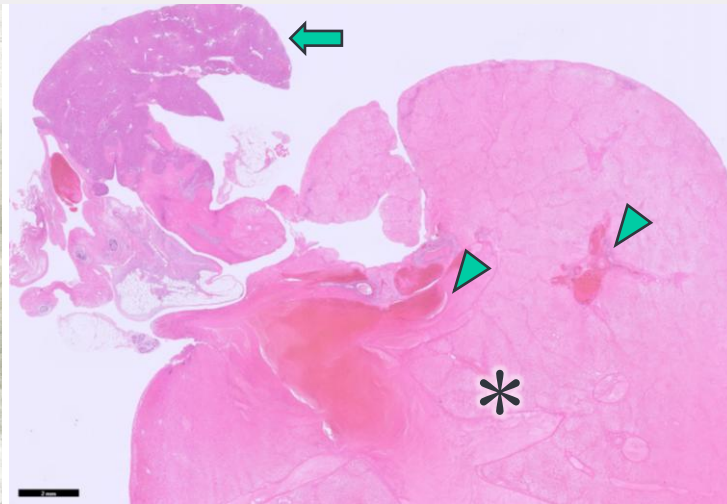


図 1. 肝臓の臓側面、ホルマリン固定後の肉眼写真。アスタリスクの肝葉(おそらく尾状葉)が捻転し、他の肝葉とは異なり暗色調を呈しています。(矢頭:胆嚢)

図 2. 捻転部の基部の組織写真、低倍像。捻転した肝葉(*)は全体が出血・壊死しています。太い静脈は拡張して鬱血しています(矢頭)。(矢印:非捻転の肝葉)

捻転は臓器が捻れて血流が遮断される状態で、壊死や鬱血が生じます。ウサギの肝葉捻転は稀で、剖検時の偶発病変が多いとされてきましたが、近年は生前診断される例が増えています。食欲不振、無気力、糞便減少など胃腸鬱滞に似た非特異的な症状を示しますが、突然死もありえます。貧血、血小板減少、血中ALTなどの上昇が見られますが、診断にはエコー検査が最も有用です。

多くは尾状葉に発生し、おそらくこれは尾状葉の付け根が細いためです。次に右葉が多いです。

肉眼的に罹患肝葉は暗赤色を呈して脆弱化します(図1)。組織学的には急性虚血性壊死を起こすと言われていたりますが、自験例では出血や鬱血を伴っています(図2, 3)。慢性化すると罹患肝葉は萎縮し、被膜の線維化が見られるそうです。

治療の第一選択は外科手術です。内科療法は長期かかるかもしれません。尾状葉より右葉の方が、貧血は中等度～重度の方が、7日間生存率が低いそうです。胃腸鬱滞の既往歴がある症例が多く、治療後も胃腸鬱滞を繰り返すと言われます。

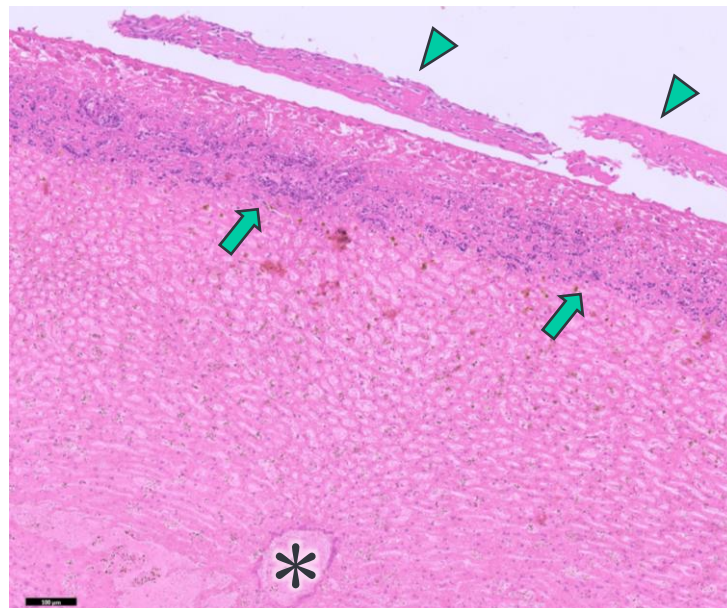


図 3. 図1, 2とは別症例の捻転した肝葉の組織写真、中倍像。組織内部は出血・壊死し、静脈の拡張(*)の陰影が見られます。漿膜面にフィブリン析出(矢頭)や表面付近で層状の偽好酸球浸潤(矢印)が一部に見られます。

執筆者からの一言

無断での転用/転載は禁止します。

ウサギの疾患の中でも肝葉捻転はここ10年で認知度は上がっていますが、図1, 2の症例のように腫瘍として提出される症例にも稀に遭遇します。胃腸鬱滞と症状が似ていますが、この疾患を知っていればエコー検査で臨床診断が可能なので、さらに周知に役立ててほしいと思い、今回取りあげました。我が家のウサギも軽度の小腸閉塞になったときには、エコー検査をして肝葉捻転の否定をしてもらい安心しました。

参考文献

1. Pathology of Small Mammal Pets. 2018. Wiley-Blackwell.
2. Pathology of Laboratory Rodents and Rabbits. 5th ed. 2025. Wiley-Blackwell
3. Ozawa SM et al., JAVMA 2022, 260(11): 1334-1342.



執筆: 中嶋 朋美
DVM, PhD, DJCVP